

夕映の窪みに村や春の富士

垂るる枝に離るる影や春の水

かきつばた一重瞼の師をふたり

茶柱のやうに尺蠖立ち上がる

青嵐鯉一刀に切られけり

店奥は昭和の暗さ花火買ふ

百物語唇なめる舌見えて

旅にゐて塩辛き肌終戦日

刃となりて月へ飛ぶ波沖ノ島

ばらばらにゐてみんなゐる大花野

日の没りし後のくれなゐ冬の山

山壁を白狼走る吹雪かな

あとがき

「都市」を始めて十二年が過ぎ、第三句集『朝涼』を出してから九年が過ぎました。この句集は平成二十三年秋から令和元年暮れまでの作品を納めました。自分なりですが、句材を広げ、色々な詠方を試みました。特に吟行では、小さなものたちの命を描きたいと思い、旅吟では、その土地への思いを下敷きにして風景を描きたいと思いました。そして漢字一字の詠みこみ題詠では、自在な発想で切れ味の良い句を作りたいと願いました。

今回の句集は、年代順ではなく、ささやかですが、テーマを決めて章立てをしました。

この間、俳句の精神を教えてくださいました宇佐美魚目先生と、幼いころから可愛がってくれた伯母が、共に九十代で亡くなり、また、「鷹」時代、編集部でお世話になり、「都市」に原稿を書いて下さっていた

大葉紫逢さんが、連載中に病気のため六十代で亡くなられたのは痛恨事でした。

明るい話題では、毎年小諸で開催される日盛会に十一回の内、十回参加することができました。そして、もうひとつ、毎年奈良の句友宅に泊めて頂き、奈良吟行を続けて、こちらも十一年になります。継続は力と言いますが、小諸と奈良から受けた恩恵は計り知れませぬ。これも俳縁のお陰と思っております。この他にも、多くの俳縁に恵まりましたことを感謝しております。

出版にあたり、畏友から親身な助言を頂きました。また、本阿弥書店の黒部隆洋氏に大変お世話になりました。最後に一緒に句会をして下さった句友の皆様にお礼申し上げます。

二〇二〇年　　ゆりの木の花が咲いた日に

中西　夕紀